

# 最優秀賞 国土交通大臣賞

## 「水」を考える

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校

二年 松本 咲葵

「節水しましょう」夏が近づいてくると毎日のように、目にし耳にする。「節水」という言葉は、まるで地域限定の夏の季語になっていくかのようだ。

「まだ三十%ないよー。プールできるん!?」と小学生の妹が叫ぶ。朝起きるとパソコンを立ち上げ、早明浦ダムの貯水率をチェックするのが、彼女の日課になっているのだ。皮肉なことにこの貯水率チェックのおかげで、%の意味をなんとなく理解できるようになった。

ここ香川では、毎年夏になると水不足になる。小学校六年間のうちに何回水泳の授業ができただろうか。簡易給食になり、紙ナプキンの上にパンが置かれたこともある。状況がひどくなれば夜間断水になってしまう。ニュースでは夏の風物詩のように早明浦ダムの底に沈んだ役場が姿を現したと伝えられる。日常的「節水」はしているはずなのに、繰り返される深刻な渇水。ふと気がつく、「夏になると水が足りなくなる」という状況が当たり前になってしまった私がいた。

このとき私は「慣れてしまうことの恐ろしさ」に気がついた。心のどこかに『取水制限が始まって、まだまだ大丈夫。』『貯水率が0%になっても、発電用水があるよ。』『そうこうしているうちに台風が来て、あつという間に貯水率100%になるよ。』そんな楽観的な考えが潜んでいる。これはきっと私だけではないはずだ。

「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」ということわざ通りのことを、毎年繰り返しているのではないだろうか。雨が降らないことだけでなく、この意識も水不足が解消できない一つの要因になっていると私は思う。

私は、ため池のある香川の風景が好きだ。それは、昔の人たちが「どうしたら渇水を防げるだろうか?」と知恵を絞って作り上げた汗の結晶である。この緑豊かでホッとする風景をいつまでも見られるように残したい。そのためにも昔の人には負けないように、水と向きあっていかなければならない。

世界規模で見ると、まだ日本は十分水に恵まれている国である。しかし、現在地球上の六人に一人、つまり十一億人の人々が安全な水が足りない危機的状況(水ストレス)に直面しているらしい。工業化や人口増加による水質汚染や水不足、温暖化による気象の変化などが原因だと考えられると、テレビで取り上げられていた。

こんな言葉を聞いたことがないだろうか。「二十世紀の戦争が石油とすれば、二十一世紀は水をめぐる争いの世紀になるだろう。」これは一九九五年、当時の世界銀行副総裁であったイスマル・セラゲルディン氏の言葉だ。日本は永遠に水ストレスの低い国であり続けることができるだろうか。日本でも近年、カラ梅雨やゲリラ豪雨などの異常気象が起ることがある。だから将来水ストレスが高まる可能性が十分考えられる。

今年の早明浦ダムの貯水率はようやく100%になった。しかし恵みの雨は、土砂災害などの危険も一緒に連れてきた。やはり水ストレスが低い今から、雨に頼らない様々な対策を行っていくべきだ。当たり前のことだが、私たちは水がないと生きていけない。水とうまく付き合っていく方法を形にすることが、私たちの責任ではないだろうか。

私たち一人一人にできることは限られている。けれど渇水の影響を受けている私たちが水の大切さを呼びかけ続けることが大きな力となるはずだ。